

# 語り合う文学教育

2011 年度・第 4 号 7 月 2 1 日

## 6 月と 7 月のとりくみ

### ☆ 6 月 2 3 日・奈良教育大学付属小学校研究授業

「つり橋わたれ」菱井一宏さん

校内研究授業でした。見せていただいた後、この作品をとりあげた意義、物語の授業の組み立てなどについて、話し合いました。

### ☆ 三重例会 6 月 2 5 日

若山博史さんの実践報告・「生き物は円柱形」(本川達雄・5 年)

参加者は 1 6 名でした

新しく光村に入った教材です。『ゾウの時間・ネズミの時間』の本川さんの書き下ろしだそうです。若山さんの教材分析を紹介します。

この作品は、「始まり」「中 (①②)」「終わり」という構成でできている。しかも「始まり」で結論を述べて、「中」で具体例を挙げて説明し、「終わり」で筆者の考えをまとめるという演繹型の手法を用いて書かれている。

作品の題にもなっているが、「生き物は円柱形」という言葉は非常にインパクトが強く、読者に驚きを与える。しかも、筆者は冒頭の段落で「生き物は円柱形だ」と言いきっている。さらに、指やミミズやへび、ウナギ、ネコ、イヌの例を出し、次に植物へと進んでいく。例外として、チョウと木の葉を挙げるが、後で、例外の中にも円柱形が含まれると展開する。

また、円柱形のよさが、「強い」「速い」であることを、チョウの羽や葉脈、ミミズ、マグロを出して説明している。このような説得力のある展開に、読者はだんだん引き込まれていく。

しかし、本川さんが主張したいのは、「生き物は円柱形だ」ということではない。作品の最終段落では、「その多様性を知ることはとてもおもしろい。それと

同時に、多様なものの中から共通性を見だし、なぜ同じなのかを考えることも、実におもしろい。」としめくくっている。この部分から、筆者の主張は「生き物は円柱形」ということに帰結するのではなく、「多様なものの中から共通性を見だし、なぜ同じなのかを考えること」へと拡大して、自分の考えをしめくくっている。生物学者として、多様な生き物を研究してきた筆者だからこそ、言える言葉であろう。

これは実に的確な内容紹介です。この説明文を読んだことがない人も、大体の内容がわかるでしょう。

ところで、まず論議になったのはこの説明文の「演繹型手法」ということです。

辞書によると、「演繹」は、普遍的な知識を前提として、個別的な知識を結論としてみちびく推論を言うと言われていました。対語は「帰納」です。これは、多くの個別の現象から、普遍的な知識をみちびき出す推論です。わたしたちになじみの考え方です。

でも、演繹の前提となる普遍的な知識は、帰納でみちびくか、仮説に依るしかありません。

このことに関わって、藤原先生は、まず定義してみることが大切と言われました。つまり前提となる普遍的な知識は、あくまで仮説なので、ひとまずこう考えてみる、というところから出発するということです。

この場合は、生き物は全て円柱形をしていると定義してみる、少々の凸凹はあっても、円柱形とみなそうということです。そう定義すると、新たに見えてくるものがある、それは、円柱形であることの意味、つまり「強い形」「速い形」ということです。そこで何も見えてくるものがなければ、はじめの定義がおかしかったということだ、と言われました。

松本吉弘さんは、形を表す時に「四角い形」「丸い形」とはよく言うが、「強い形」「速い形」と、機能と形とを結びつけた言い方に、子どもたちの目を向けさせたい、と言います。確かに、そういう言い方が生まれたのも、生き物は円柱形だと定義したからこそですね。

実際の授業では、「生き物はみんな円柱形って、言い過ぎだ」「考えすぎだ」という声がかかり出ました。定義から出発する述べ方・考え方に慣れていないからでしょう。

何人かの読みをたどります。

孝くんは、学力に課題があります。低学年の漢字が書けなかったり、九九がしっかり言えなかったりします。

#### おにぎりおつくたとき

ずーっとまえおにぎりおつくりしました。そのおにぎりわかおみたいなやつになるようにのりできてはるかたちおきてはりました。それでたべるととてもおいしすぎで、「おいしい」とさげびました。そうするとたたかれました。うるさいといわれてはいといいました。そのよる、ねむれませんでした。

#### おにぎりを作った時

ずーっと前におにぎりを作りました。そのおにぎりは顔みたいなやつになるように海苔で切って、貼る形を切って貼りました。それで食べると、とてもおいしすぎで、「おいしい」と叫びました。そうすると、叩かれました。「うるさい」と言われて、「はい」と言いました。その夜、眠れませんでした。

孝くんの日記です。この夜眠れなかったのは、叩かれたからではなく、妹の世話をしていたからだそうです。

孝くんの読みをたどります（漢字に変換しました）。

#### (①初めの感想)

ぼくはすごいと思いました。そんなの想像したら気持ち悪いし、そんな実験して楽しかったのかと思って、すごいと思いました。

#### (②筆者の考えをどう思うか)

ぼくはこういうふうに思いました。あんまりぼくは生き物は円柱形だとわからなかったけど、本を読んだらなんとなくわかりました。

#### (③おわりの感想)

ぼくはこういうふうに思いました。あんまりぼくは分からなかったけど、なんとなくわかりました。

孝くんは、はじめの「生き物は円柱形だ」という定義に感動しているようです。しかし、具体的な文章の読みとりになると、やはり基礎的な読解力が課題になったように思えます。限られた体制の中で孝くんの成長をどう支えていくか、今、どの学級にもある大きな課題だと感じました。

美さんは、明るくまっすぐな気持ちの感じられる子です。学校では友だちとにぎやかに遊んでいますが、家では祖父母との三人暮らしで、一人であることがほとんどだそうです。メダカの世話や、カナヘビ取りも好きな子なので、この説明文には興味を示すだろうと考えました。

①生き物が円柱形だというのにびっくりした。ぱっと見て、ぜんぜん円柱形に見えない生き物も、よく見たらたしかにそうかもしれないと思いました。人が「気をつけ」の姿勢をしたら、円柱形に見えなくはないけど、ちょっと考えすぎかなと思いました。

②最初は、「気をつけ」の姿勢をすれば体全体が円柱形だ、というのは、考えすぎだと思ったけど、今は、どっちかというところだなと思いました。それに、円柱形は速くて強いということも、実験してみてその通りで、なるほどと思いました。それに、多様な中から共通性を見つけるのもおもしろいと思いました。

③最初は、「気をつけ」の姿勢を人がすれば、体全体が円柱形だというのは、考えすぎだと思ったけど、今は、たしかにそうだなと思いました。それに、円柱形は速くて強いということも、実験してみてその通りで、なるほどと思いました。それに、多様な中から共通性を見つけるのもおもしろいと思いました。

②は10時間目の授業の前に、筆者の考えをどう思うかそれぞれがまとめたものです。その話し合いを受けてまとめた終わりの感想③もほぼ同じ内容ですが、「どっちかというところだな」が「確かにそうだな」に進化しています。美さんなりに、そう定義するんだということが納得できたのでしょう。

まだまだ授業中の活躍は少ないようですが、説明文でも物語でも、自分の読みを持って語り合うところから、きっと友達の輪も広がっていくでしょう。

終わりの感想を読んでもみると、何人かは定義するという意味を読んでいるように思えます。

例えば、稔さん。

①円柱形の意味がわからなかったけど、円柱形はスティックのりのような形だということが分かりました。人がなぜ強いかというと、円柱形だから強いということが分かりました。ミミズがなぜ円柱形の形をしているのかというと、「土の中を進んでいく時の抵抗が少なく、楽に進めるから」ということが分かりました。学校の中にも円柱形があります。探すのはおもしろいから、今度探してみようと思います。

③本川さんの考えは分かりやすいです。特におもしろいところとかを書いてくれ

であるし、生き物は円柱形ということが分かりました。指は確かにでこぼこしているけど、でもこの本の中では「円柱形とみなすことにしよう」というのは、多少でこぼこがあっても円柱形にする、ということが分かりました。

穂さん。

①わたしは、これは「見立てる」という行いだと思います。なぜかという、指は実際に指だけど、見立てると円柱形だからです。だから、例が指であると、円柱形は「見立てる」行いだと、わたしは思います。

③わたしは見立ててると思いました。確かに、指をよく見ると円柱形だけど、よく見ないかぎり円柱形じゃないからです。

それと、本川さんはすごいと思いました。なぜかという、身近な物から自然の物までをとててもくわしくのせてあったからです。とてもいろんな研究をしたんだなあと思いました。

稔さんも穂さんも、定義するということが分かっているようです。その上で、稔さんは、教材文には書かれていない学校内の人工物にも目を向けようとしています。穂さんは、本川さんの発想自体に感動しているようです。

藤原先生は最初に紹介した「演繹」の説明に続いて、定義づけることでその意味が見えてくる、見えてきた意味は、その他の領域にも通用する。円柱形であることの意味は強くて速いということ、それは科学技術にも応用できる。そのような広がりがないのなら、はじめの定義が間違っているか、狭かったかということだ、と述べられました。

稔さんの読みはその過程をたどっていますね。

守田先生は、今日のような論議が教室でもできれば説明文の授業はおもしろくなる、との前置きで、こんなことを言われました。

この説明文は、高校の評論につながる内容と述べ方をしている。演繹的な述べ方自体が、仮説（定義）から出発するものだが、その仮説はふつうの物の見方に対する批評性を含んでいる。批評というのは、単なる批判ではなく、批評する主体をも問いなおすという意味だ。読み手も批評的に読むことが求められるだろう。

説明文は何もかも説明し尽くすことはできない。ここでは、円柱形であることは、生物の、必然性に支えられた共通性として見いだされているが、その必然性の根拠は必ずしも全て述べられているわけではない。地球の重力下ではそ

うならざるを得ないのだろうが、それは今回の主題ではない。

また、「強い」は実験例が示されているが、「速い」の例は、ミミズとマグロが挙げられているのみである。この両者の速さの基準はもちろん違う。

このあたりは、読み手が主体的に、まさに批評的に関わり、これまでの自分の知識や認識を問いなおす契機になりうる。おもしろい授業が組めるのではないか。

説明文の授業を段落わけと要約だけに終わらせない方向が、だんだん見えてきたように思います。

内緒で小さい声で言うと、わたし（橋本）は、円柱形という共通性を見いだす方向より、同じ地球という環境下でさまざまに適応している差異の多様性を見いだす方向に魅力を感じているのです。

**☆奈良例会 7月2日 鈴木啓史さん 「いじめっ子が二人」**

参加者は7名でした。

この内容は、夏の近畿東海教育研究サークル合同集会で発表されます。今回の鈴木さんのとりくみのテーマは、「仲間との関係の中で自分をを見つめなおす」ということです。「いじめっ子が二人」を読む中で、子どもたちはどんなすがたを見せたでしょうか、8月27日をお楽しみに！

## ◇これからのとりくみ◇

### ◆7月23日（土）三重例会

○午後2時半～5時 三重大学教育学部4階国語ゼミ室

○実践報告「ごんぎつね」中西祐司さん

◇7月29日～31日 日本作文の会 全国作文教育研究大会（東京）

前回の会報でお知らせしたとおりです。誘いあって行きましょう。

## ◇8月6日～7日 日本文学協会国語教育部会夏期研究集会（東京）

8月6日（土）は、午後1時から始まります。会場の二松学舎大学は、地下鉄「九段下」駅から10分ぐらい見ておくといいいでしょう。開会あいさつは、会員の横山信幸さんですので、遅れないように集まりましょう。

基調報告は、去年尾鷲に来ていただいた田中実さん。

講座では、小学校は「おにたのぼうし」についてわたし（橋本）が、ほかの先生方と話し合います。中学校は「走れメロス」、高等学校は「レキシントンの幽霊」などについてです。

7日（日）は、朝9時からです。

小学校分科会は、千葉の先生が「きつねのおきやくさま」、そして草分京子さんが「大造じいさんとガン」の実践報告をします。

中学校、高校もそれぞれ分科会があります。

午後1時から、「〈文脈〉を掘り起こす」をテーマにしたシンポジウムです。高野光男さん（都立高専）と府川源一郎さん（横浜国大）に加えて藤原和好先生の3人です。どういふ討論になるのか、大変楽しみです。

参加費は3000円（学生2000円）、一日だけだとその半額です。事前申し込みが原則ですが、当日参加も可です。

詳しくは、わたし（橋本）か、日文協（03-3941-2740）へ。

## ◇8月19日（金）午後1時～ 三重と愛知合同の作文教育研究集会

三重大学教育学部1階多目的ルーム・草分京子さんが実践報告をします。

## ◆8月20日（土）午後2時～21日（日）午前11時半 語り合う文学教育の会夏の合宿研究会

会場は奈良教育大学付属小学校です。宿舎は各自おとりください。

20日（土）午後1時半～ 受付開始

2時～ 職場や子どもたちの近況報告など

2時半～ あいさつ（藤原和好先生）

引き続いて実践報告 入澤佳菜さん（奈良）

午後5時終了。6時から懇親会。

21日（日）午前9時～ 受付開始

9時半～ 実践報告 庄司たづ子さん（三重）

11時～ 機関誌10号の編集について

## ◇8月27日～28日 近畿東海教育研究サークル合同集会・奈良教育大学

この案内は、それぞれの地域民教連（サ連協）から届いていると思います。

27日（土）には、あまんきみこさんの講演があります。分科会は3時間しかありませんが、先に紹介した鈴木啓史さんの実践報告があります。

28日（日）は終日さまざまな講座がひらかれます。

## 今年度会費納入は80名（7月16日現在）

語り合う文学教育の会は、子どもたちの人間的な自立のために国語科教育は何ができるか、どうあるべきかを考える集まりです。まずは、物語や小説、また説明文・論説文の授業で、子どもたちが主体的な読み手になる、自分の読みを作っていく授業をめざしています。

会の運営は、会費と機関誌の売り上げと寄付で成り立っています。会費納入者80名というのはちょっと危ない水準です。会員の方で、うっかりしておられる方、また新たに会員になろうと思われる方は、同封の払込用紙をお願いします。

年度会費は、次回大会（2012年3月予定）まで有効です。次回大会は機関誌が10号になるので記念に少し大きい物を出そうと考えています。その出版のために、なんとか100名にしたいと思っています。ご協力をお願いします。

また、郵送費節減のため、次号から会報の郵送を会員にかぎらせていただきます。

もちろん会員以外の方も例会には自由に参加できます。例会案内や、実践報告内容などはホームページをご覧ください。

◇語り合う文学教育の会会報◇ 文責＝橋本博孝

連絡先 514-8507 津市栗真町屋町 1577 三重大学教育学部

国語科教育研究室（橋本博孝）

メールアドレス [hiro3614@edu.mie-u.ac.jp](mailto:hiro3614@edu.mie-u.ac.jp)

電話 059-231-9210